

は 話し合いにはまちを動かす力がある

私が携わった仕事の中では、まちづくりの話し合いの場を企画・運営することを依頼されることが多かった。おそらく私が引退した後の事務所もそうだと思う。大抵は自治体の計画や事業に対して住民の意見を反映することを目的とした話し合いなのだが、時には住民の側から自分たちのまことを自分たちの力で考え、自分たちでできることはやっていきたいという相談を受けることがある。その場合は、どのようなテーマで話し合うか、参加者をどうするかなどの話し合いの企画を一緒に考え、話し合いの運営は自分たちで行うようにしようと提案することが多い。

話し合いの目的は何かについては、かなり議論する。話し合いはあくまで手段であり、話し合った結果をどのように自分たちのまちに生かしていくのか。そのことをあらかじめしっかり考えておきたい。そして話し合いの結果をまちに生かしていくためには行動する人たちがいなければならぬ。しかし、多くの場合はまちのなかで動く人は限られている。いたとしても現在の活動で手いっぱい、新たな取り組みに踏み出せないのが現状だ。それでもまちのために何かしたい、あるいは何かすること、そのまちに暮らしていることを実感したい。そして、そのことをつうじて新しい人のつながりが生まれると嬉しいと思っている人は必ずいる。そこまで強い思いが無かったとしても、ちょっとしたきっかけでまちのために動き始める人を多く見てきた。話し合いはそのような人との出会いの場になる。

だから、日頃よく知っている人同士だけで話すのは勿体ない。できるだけ多くの人に参加してもらえようようにしようと提案することになっている。「話し合いは百人でやろう」とハッパをかける。二十人ぐらいで話し合いをして確認されたまちの課題と、百人が話し合いをして確認された課題では仮に内容は同じでも、その後の課題解決の展開は大きく違う。おそらくそのまちで百人の人が一堂に介して話し合うのは初めての出来事だろうし、結果の共有感も一段と高まる。そのような大規模な話し合いを円滑に運営するためのプログラムは綿密に検討する必要があるし、話し合いの進行役（ファシリテータ）を二十人ぐらい、それも短期間に育成することも必要になる。大変だがやる価値は高い。経験からそう思う。